

国立民族学博物館所蔵・鹿野忠雄コレクションの基礎的研究

代表研究者 吉田 泰幸

金沢大学国際文化資源学研究センター 特任准教授

はじめに

本研究は多様な業績から博物学者とも称される鹿野忠雄が瀬川孝吉らと1930～40年代に日本統治時代の台湾において採集・発掘した考古資料の中でも、石製装身具とその製作技術を示す資料群（「鹿野忠雄アーカイブ」「瀬川孝吉コレクション」として国立民族学博物館に所蔵されている資料の一部）に着目し、それらの再検討を行うことで、東・東南アジア先史考古学研究への貢献を目指す。現在の研究状況における資料の位置付けを明確にすることで、各国の東・東南アジア先史考古学研究者が上記資料の限られた情報を参照する他ない状況において詳細情報を国内外で共有すること、この2点が本研究の目的である。

鹿野は台湾調査の成果を記した著書¹⁾において、石製装身具およびその製作技術を台湾と東南アジア大陸部・島嶼部、香港との比較の中で位置付け、先史文化の伝播について注目すべき仮説を披露していた（図1）。ここでは台湾は鹿野の言う「文化移動」の受け手となっている。現在の先史東・東南アジア研究では、新石器文化＝農耕文化と言語集団の拡散過程の結びつきを想定した先史時代像も復元されており²⁾、台湾は東南アジア島嶼部、アセアニア、果てはマダガスカルへとオーストロネ

シア語族が拡散していった起点とも考えられている。近年の研究動向では、先史台湾は図1より広範な地域との比較の中で検討される対象となっている。鹿野の仮説は言語分布も視野に入れつつ、物質文化の検討に重心があった。対して、現在の先史文化の動態復元は言語学、古植物学、形質人類学に重心があり、物質文化の詳細な検討は課題の一つである。こうした状況では、現在では少なくとも図2に示す地域を視野に入れ、鹿野らが採集した先史物質文化を再検討する必要がある。

代表者の吉田は先史東・東南アジア玉器製作遺跡の研究を進めており³⁾、共同研究者の山形眞理子は先史時代東南アジア島嶼部と大陸部の関係が主要研究テーマのひとつで、石製装身具の型式学的分析・地理的分布の分析は重要なテーマである⁴⁾。飯塚義之は台湾産のネフライト製品が東南アジア島嶼部だけでなく大陸部にも広く分布することを明らかにした考古鉱物学的研究の中心メンバーである⁵⁾。これら複数の視点から再検討を行うことに本共同研究の意義がある。

検討方法

本研究は鹿野忠雄らが1930～40年代に台湾で採集・発掘した考古資料の中でも石製装身具およびその製作技術を示す資料群として、「鹿野忠雄アーカイブ」から13点、「瀬川孝吉コレクション」から22点の計35点を再検討の対象とした。次の二つの方法で検討を行う。

方法1：上記資料の実見・熟覧を元に、基礎的な考古学的データを抽出し、現在の研究状況にそれらの資料を位置付ける。

方法2：上記資料の素材が何であるかは、鹿野の言う文化の「移動」、近年の研究状況では言語集団の「拡散」を考察するうえで重要な要素である。上記資料の蛍光X線元素分析を行うとともに、台湾外の関連資料に対しても同様の分析を行い、先史文化の動態復元に寄与する基礎的データを充実させる。

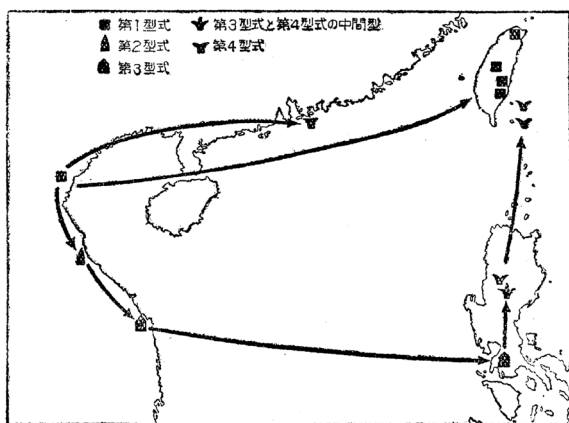


図1 鹿野忠雄の想定した「文化移動」（本文註1文献）

検討結果 (図2参照)

方法1・2のうち、方法2は現時点(2016年6月末)では未着手である。ここでは方法1の結果を述べ、方法2の着眼点、計画を次節で述べる。

選定した資料を実見・熟覧し、鹿野の著書に収録されている資料との特定・照合、詳細な観察・検討を行った。鹿野の著書に収録されていないが、現在の研究動向でも重要な資料も再発見することができ、考古学的データの充実を図ることができた。個々の詳細は別の機会に譲り、本報告では「はじめに」で記した研究動向において重要な、台湾と他地域の結びつきを示唆する例を以下に示す。

1. 火烧島(現・緑島)採集の玉芯について: 鹿野の著書との対照作業等から、火烧島採集と結論付けられるこれらの資料は、環状の石製装身具を製作する際に、中心孔の部分を作り出すために削り貫かれた廢材(筆者は「玉芯」と称している)である。素材両面を平滑に磨いた後に円形の溝を片方から入れて深くし、ある程度の段階でもう片方から同様に円形の溝を入れて削り貫きを行う。この特徴は中国南部が起源地と想定され、遼東半島、ベトナム、台湾本島にも同様の特徴の玉芯がみられる。
2. 火烧島採集の可能性のあるペルタ形ネフライト塊⁶⁾

について: 鹿野によるものと考えられる注記の痕跡から、火烧島採集の可能性がある。複数の円形削り貫きから生み出される形態である。こうした形態は、現在のところフィリピン・パタン諸島から出土しているのみであり⁷⁾、分布状況を更新する資料として位置付けることができる。

3. 型式学的関連が想定される耳飾り群について: 台湾北部の円山貝塚、南東部の卑南、火烧島(現・緑島)、蘭嶼(旧・紅頭嶼)採集の耳飾りはいずれも周縁部に4か所の突起を有する耳飾りである。突起の造作だけを見ると、東南アジア島嶼部、大陸部に広く分布するリンリンオーと呼ばれる耳飾りの突起部との型式学的関連が想定される。

考察 (図2参照)

前節で指摘した考古学的検討から導かれた台湾外との結びつきは、どのような先史時代動態と解釈されるのだろうか。その点に、方法2の鉱物学的分析は重要な役割を果たす。今回特記した資料も肉眼観察では台湾産ネフライトと思しきものもあれば、そうでないものもある。「人の移動・往来と石材・製品の産地」をキーワードとして、鉱物学的分析に向けた課題を整理することで現時点での考察としたい。



図2 鹿野忠雄台湾考古資料の再検討 (図中写真の資料はすべて国立民族学博物館所蔵)

地図中の矢印・語族・年代は本文註2文献を参照した。現在の研究動向、仮説を示すもので、本研究グループの見解を示すものではない。

1. 火焼島（現・緑島）採集の玉芯について：形態からうかがえる技術は大陸部と類似している。この技術を記憶・継承した人々はどこから石材を調達したのか、どこかに特定の産地があるのか、それとも各地の石材を利用しているのか、これらの疑問に答えるためには、火焼島採集の玉芯だけでなく、各地での分析が必要となる。本研究では、鹿野が台湾への文化「移動」を想定した北部ベトナムとの比較をまず行う。
2. 火焼島採集の可能性があるペルタ形ネフライト塊について：この形態の分布は今回の再発見でバタン諸島から台湾にまで広がったが依然限定的である。この特異な技術も台湾ネフライト利用の中で生み出されたものなのだろうか。
3. 型式学的関連が想定される耳飾り群について：突起の形態だけを見ると、突起が緻密になり、リンリンオーの突起に変化していったとも解釈できる。この解釈は現時点では年代的裏付けに欠け、作業仮説にとどまっている。しかし、広範に分布することで知られているリンリンオー以外の形態の耳飾りについても鉱物学的分析を進めておくことは、将来的に耳飾り編年が整備された時にその背景を考察する際に有用であろう。また、東南アジア大陸部のリンリンオーや関連する装身具類の石材は悉く台湾ネフライトなのだろうか。それらの検討によって、広範囲で共通する形態を有する装身具類がみられる現象についての解釈に、一つの定点を提供するだろう。本研究では、南シナ海を挟んで反対側に位置し、島嶼部との繋がりが盛んに議論されているベトナム中部出土の耳飾りとの比較検討を行う。

鹿野らが採集した考古資料は、形態を中心に分析し、東・東南アジアを広く比較対象とすると、「特定の技術を含む物質文化が大陸から渡来し、独自にその技術とそれから生み出される装身具を発達させ、他地域への拡散の出発点となった場としての先史台湾」を示唆する好例と現在では捉え直すことができる。台湾にはさらに詳細な先史時代人の行動、先史時代動態を読み解く基点としてネフライト産地がある。形態の観察と分布の検討から導かれた考古学的な広範な共通性に、産地が限定される石材の分布はどのように重なり合うのか、あるいは重なり合わないのか（鉱物学的検討）、この疑問に共同で取り組むことによって、鹿野が描こうとした先史文化の動態復元を今日的な意味で深めることができる。

要 約

1. 鹿野忠雄らが1930～40年代に台湾で採集した考古資料、中でも石製装身具とその製作技術を示す資料群は現在の東・東南アジア先史考古学研究においても重要資料であり、それらの詳細情報を国内外で共有することに本研究の意義がある。
2. 鹿野が石製装身具を中心に描いた、北部ベトナムとフィリピンからの「文化移動」の受け手としての先史台湾像は、鹿野の採集した資料の再検討からも見直す必要がある。
3. 先史時代の「文化移動」あるいは特定集団の移動・拡散も視野に入れて議論がなされている近年の東・東南アジア先史文化研究に本研究で扱う物質文化から貢献するには、個々の資料の鉱物学的分析が必要となる。それを元にした個々の資料の来源の推定によって、先史時代動態を知る手がかりを得ることができる。

謝 辞

共同研究者の山形真理子、飯塚義之に加え、以下の方々、機関に多大なご協力をいただいた。記して感謝したい（敬称略）。

張雅恵、日高真吾、河村好光、李坤修、深山絵実梨、野林厚志、藏振華、内田純子、葉長庚、鈴木朋美、公益財団法人三島海雲記念財団、国立民族学博物館、台湾中央研究院歴史語言研究所、台湾中央研究院地球科学研究所、国立台湾史前文化博物館

文献および註

- 1) 鹿野忠雄：東南亜細亞民族学先史学研究（上）、矢島書房、1946。同：東南亜細亞民族学先史学研究（下）、矢島書房、1952。
- 2) P. Bellwood: *First Farmers*, Wiley-Blackwell, 2004. D. Q. Fuller, *Rice*, 4, 78-92, 2011.
- 3) 吉田泰幸：東南アジア考古学, 35, 59-65, 2015.
- 4) 山形真理子：海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ（菊池誠一・阿部百合子編）, pp. 30-50, 高志書院, 2010.
- 5) H. C. Hung, et al.: *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 104-50, 19745-19750, 2007. 飯塚義之：海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ（菊池誠一・阿部百合子編）, pp. 51-65, 高志書院, 2010. 飯塚義之：日本電子news, 44, 23-39, 2012.
- 6) H. C. Hung, Y. Iizuka: 4000 Years of Migration and Cultural Exchange (P. Bellwood and E. Dizon eds.), pp. 149-168, 2013. ヨーロッパの装飾品との類似から、Pelta-Shaped nephrite segment（ペルタ形ネフライト塊）と命名されている。
- 7) 前掲註6